

五 入れ智慧の不徹底

入れ智慧と云ふものは兎角徹底しない。その智慧も能く消化して、自分のものにならなくては、所謂生兵法大怪我の元と云つた風の事になる。自分の血となり肉となつた智慧でなくては、徹底したのでない。

釋尊御在世の當時、朱利槃特と申して、大層物覺えの悪い御弟子がありました。自分の名前をさへ覺えることが出来ぬ、で人から名前を聞かれた時に困ると云ふので、墨黒々と衣の上に、朱利槃特と書いて貰うて居られたさうであります。此話を聞きかちつて居た男、さも得意氣に、友達の至つて能く物事を忘れる男をつかまへて、「君のやうに能く物を忘れる男は、恰度釋尊在世の當時の……あの釋尊在世の當時の……あの……それ、俺も忘れて仕舞つた」と云つたと云ふ話があります。

これはまた今々出來の説教師。一生懸命説教本を覺えたまゝ餘程はづんで彌陀觀音勢至の三尊の御徳を述べるつもりで、「左は觀音勢至……」とやつた。處が云何してもあとが出ない。も一つ云ひかへて「左は觀音勢至……」云何しても右が出て來ない。途切れば面白くないから、思切つて「左は觀音勢至……右は何んにもない……」と云つて仕舞つたさうな。左へ觀音様を置いて、右へ勢至様を置けばよいのを、一緒に左へ置いて仕舞つたので、仕様がなない。

又或時、上方役者が田舎廻りをしました時、役者が足りないで、臨時一人の田舎役者を雇ひ入れた。處で、或舞臺で、その田舎役者が「御注進く」と云ふもので、勢ひ込んで元氣よく、花道から飛び出したはよかつたが、さて肝心な云ふことを、すつかり忘れて仕舞ふた。何と云ふたものかと慌こんで、そつと向ふの役者の耳元によつて、云何口上を述べるのかと聞かうとす

ると。流石は上方役者、そのまゝ「出かした急げ」と呼ばつて、その場の調子を外さなかつたと云ふことであります。

集會の席から這々の體で、しほけて歸つて來た息子。涙ながら母に向つて訴へますやう。「お母さん、今日は實に散々な目にあひました。或人が、貴様毎夜酒を飲むかと私に尋ねますから、此頃は酒が高くてくとても飲めぬから、其代り酒の糟を食うて居るのぢやと答へますと、皆が一度にどツと笑つて、酒は高價からこそ甘いのぢや、その甘い酒を得飲まずに、糟を食うて居るやうな腑甲斐なしが云何なると、冷笑されて残念でくなりません、何かよい工夫はありませんか」と云へば、母は親切に教へた。「それはお前があんまり馬鹿正直が過ぎるのぢや、此の頃は無闇矢鱈に外觀をてらふ時節だから内では味噌をなめて居ても、鯛のお作りを食ふやうな顔するのが當世だ、それで若し人が酒飲むかと尋ねたら、正宗を樽でとつて置いて、毎日飲んで居るのぢやと云へ」。成程これはよろしい、今度は左様してやらう」と、一人ほくくして居る。次の集會へ出てみれば、各自に、酒粕先生くと冷評す。「イヤく、僕は酒粕先生でない、此頃は正宗を樽で取つて置いて、毎日之を飲んでゐるのよ」と、母に教へられた通りを申しました。「これは豪氣々々近頃大威張だ、して今日は何程飲んだのか」とつっこまれ、「左様、三枚食ふた」と思はず答へた。とうく化の皮が顯はれて、一層ひどく笑はれた。残念でたまらず、委細を母に話せば、「五合飲んだのだと、答へるのだよ」と智慧をつけられる。間もなく第三の集會の場に出た時、例の口の悪い友達が、「どうだい、今日も正宗三枚食ふたのかい」と冷評す。「今日こそは實際だ、正宗五合飲んで來たよ」と云ふ。「そうか、それは偉い、冷で飲んだか、爛をして飲んだかい」。へい、焼いて食ふたよ。又々地性を顯はして失敗した。

兎角、入れ智慧は駄目である。借物はまさかの時に通用せぬ、借着はしつくり身に合はない。『和讃』に「智慧の念佛うることは、法藏願力のなせるなり、信心の智慧なかりせば、いかでか涅槃をさとらまし」と。この智慧もいよいよ我物とならなければ、佛恩報ずる身とはならないのである。徹底して之を身に得よ。